



Title	自我の哲学としてのベルクソニスム
Author(s)	伊藤, 淑子
Citation	大阪大学, 2002, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/43322
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	伊 藤 淑 子
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 1 6 6 9 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 1 4 年 3 月 2 5 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	自我の哲学としてのベルクソニスム
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 山 形 頼 洋 (副査) 教 授 里 見 軍 之 助 教 授 望 月 太 郎

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は四つの主要著書として残されたベルクソンの思想の全体を、自我の哲学の展開発展として読み解くことを目指している。ベルクソンが四つの主著において扱った主題は、それぞれにおいて異なっているが、本論文は、これらの各著書を構成する一見独立した主題の多様性を貫いてその根底に一貫したベルクソンの思索が動いており、それは自我についての考察に他ならないと主張する。いいかえれば、各著書は、それぞれに処女作の主題である自我についての考察を心身関係として、生命論として、共同体論として深化発展させることを目的としているというわけである。

本論文の構成は、短い「まえおき」に続いて、論文全体の骨格をスケッチした「序論」を配して、三章からなる本文全体の統一的理解を助けるための見取り図としている。第一章「自我の本質と現象－純粹持続と心身関係－」は二節に分かれ、「1. 純粹持続と自我」においては、ベルクソンの処女作を分析の対象として、意識の本質は純粹持続にあること、また、意識に他ならない自我は純粹持続として規定されることが明らかにされた後、その自我に、内的自我とその内的自我が等質的時間へ映されることによって生じる外的投影との二様相があり、他方、深い自我と表面的自我の二様相があることが明らかにされる。「2. 記憶力と自我」は、第一節を受けて、自我が取る二組の二様相がどのような関係にあるかを、『物質と記憶』の検討を通して明らかにしようと努める。結論を述べると、純粹持続とは純粹記憶力のことであり、特に、ベルクソンが移行運動と名付けているものである。また、この移行運動を遂行する意識の平面が内的自我を構成し、記憶力の緊張の程度によって深い自我と表面的自我との様相の違いが生まれる。また、移行運動は行動や意志を表し、これに対していわゆる自転運動は表象作用・知覚や知性を表しているので、外的自我は、移行運動である純粹記憶力が自転運動によって知覚・表象化されて、等質的時間内に併置される結果生じるとされる。第二章「自我の原理と拡大－生命論と宇宙－」においては、自我が宇宙の生命全体の中で考察される。その際、ベルクソンにおいて生命進化の核心をなすエラン・ヴィタールは、人間種だけが個体においてエランの持つ創造性を体現していることから、前章の純粹記憶力と同じものとされる。一方、本論文では、超意識、生命原理は始原のエラン・ヴィタールとして純粹記憶から区別されている。第三章「自然の自我と超越－社会性と神秘性－」においては、自我は共同体を構成する共同主観として考察される。真の他者との関係を形成する開かれた社会は、神秘的直観に基づく神秘家の開かれた魂によってはじめて可能となるのであるが、この神秘的直観は、生命の原理である神・愛と部分的であれ一致するところに成立する。すなわち、自然の進化である人間種を超えて、個体がそのまま一つの

種であるような個人、神秘家がそうであるような個体へとさらに進化を進めるところに成立する。第一章でいわれた深い自我は、このような開かれた魂へと、神秘家に誘われて、拡大進化する可能性をもつ開かれ行く魂ということができる。

論文審査の結果の要旨

長期にわたるベルクソンの思索の歴史の中に点々と孤立した島のようにばらまかれた成果を、一つの主題をめぐる思想の発展拡大の各段階として統一的に把握する試みそれ自体がすでに野心的で、しかしベルクソン哲学の理解を深めるためには欠かすことのできない積極的な意義を持っている。とりわけ、この企ては、『創造的進化』までと『道徳と宗教の二源泉』との間にはいわば自然の直観と神秘化の超自然的直観との断絶が存在するだけにいっそう困難なものとなる。このようなベルクソン解釈の大統一理論は、可能性としては、持続や直観を軸にして構想することもできたであろうが、本論文が自我を中心概念として採用したことは、持続についての直観が自我であることからしても、優れた選択であったと評価できる。長年にわたる論者のベルクソン研究の成果と蓄積があってはじめて可能となったこの統一の試みであるが、ただ、そのぶん網羅的になりがちで、論旨の一貫性が貫徹できていないところが見受けられる。もう少し距離を取って遠目でベルクソンに接し、概念を洗練し、概念間相互の連関を十分に見極めるという作業の徹底性を欠いたために、矛盾した事態に立ち至った場面がいくらかある。例えば、知覚という機能を全体として説明する移行と自転の運動を分離して、前者を純粹記憶力さらには行動・意志とし、後者を知覚・表象・知性として独立させた結果、両者の関係の考察がおろそかになり、生命進化における生命と物質とのきわめてベルクソンの関係が曖昧になっている。その結果、エラン・ヴィタールが純粹記憶力そのものと同定され、自我と生命原理ないしは超意識との関係の考察に踏み込めない事態を招いている。そこから、さらには、神秘家の開かれた魂と自我との関係、とりわけ人間種としての自然な深い自我との関係が自我論としては不十分な展開に終わっている。自我のレベルでの純粹持続が、超意識としての生命原理の持続に拡大深化し、最後には部分的にしる神と合一する神秘家の最も強い持続となるにしたがって、いいかえると、自我は自分を超えていけば行くほど、真の個性として真の自我として実現されるというベルクソンの逆説的考えは、考究の課題としてまだ残っている。

しかしながら、このような不十分な点も、ベルクソンを統一的に理解するという本論文の生産的な企ての結果明らかになったものである以上、欠点というよりは、むしろ問題提起として積極的に評価されるべき性質のものである。本研究科委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するのに十分な価値を有するものと認定する。